

ある日曜日のことです。ひとりの娘が、教会へ行った帰りに、お屋敷のそばの林の道を歩いていました。

あまりよいお天気なので、娘はすっかりうきうきして、思わず声を出して、ひとつ、ふたつ、三つと、数を数えました。何を数えるともなく二十まで数えて、ふとふり返ると、お屋敷の息子が、後ろから歩いてきました。息子は、

「何を数えているんだい」とききました。娘は、こまっつて、口から出まかせにいいました。

「ひと晩で糸をいくかせ紡げるか、数えてみてたの」

息子は、家に帰ると、母親にいいました。

「さつき、林の中でひとりの娘にあつたんだ。その子は、ひと晩で糸を二十かせも紡げるっていったよ」

ひと晩で二十かせも紡げるなんて、そんなことができる人は、お屋敷にはひとりもいません。母親はすぐに娘の家に行きました。そして、どうか、うちではたらいしてほしいとたのみました。娘は、まさか奥さまが自分のいったでたらめを知っているとは思いませんでしたので、よるこんでお屋敷に行きました。ところが、夜になると、奥さまが羊の毛をどっさり持って来ていいました。

「さあ、これを今夜のうちに紡いでおくれ。おまえは、ひと晩で二十かせも紡ぐそうだから」

娘は、紡ぎに紡ぎました。力のつづくかぎり、息のつづくかぎり紡ぎましたが、真夜中になっても、まだ半分しか紡げませんでした。娘は泣きました。

真夜中すぎ、ふいに、赤い頭巾をかぶったこびとが、どこからか出て来ました。

「娘さん、どうして、そんな所にすわって泣いているの。助けてあげようか」

「わたし、今夜のうちにこれだけ糸を紡がなくちゃならないのに、まだ半分もできないの。手伝ってくださいれば、ほんとうにうれしいわ」

「それくらい、わけないさ。もしああなたが、あとでぼくと結婚してくれるなら、すぐに片づけてあげるよ」

「ええ、いいわ」

娘は、先のことなど考えもせずに約束やくそくしました。こびとは、紡ぎ車の前にすわると、ワン、ツー、スリー！

たちまち仕事しごとは片つきました。それからというもの、こびとは毎晩まいばんこっそりやって来ては、娘に代かわって糸を紡いでくれました。

奥さまは、娘のことがすっかり気に入りました。そこで、ある日のこと、娘に、「どうか、うちの息子と結婚しておくれ」といいました。娘はうれしかったのですが、こびととの結婚の約束は、どうすればいいでしょう。娘はこのことを、だれにもいいだせないでいました。

結婚式の日が近づくにつれて、娘はだんだん悲かなしそうになってきました。ある晩のこゝと、こびとが、気づいて、

「どうして、そんなに悲しそうにしてるの」とたずねました。とうとう娘は、

「お屋敷の息子さんと結婚するの」とうちあげました。こびとは、いいました。

「あんたが幸せわしあしになるんなら、ぼくとの約束は無なしにしてやってもいいよ。ただし、三日のうちにぼくの名前をいい当てるんだ。でも三回でいい当てられなかったら、約束どおり、ぼくと結婚しなくちゃいけないよ」

娘は、こびとの名前なんかまるで見当もつきませんでした。よるこんで運うをためしえてみることにしました。

さて、お屋敷りょうしの獵師りょうしが、結婚式のごちそうの鳥を撃うちに、山に行きました。夕方になつて、帰ろうとしていると、丘おかのそばを通りかかりました。丘の中に、あかりがいくつものもつていて、ひとりのこびとが歌いながら踊おどっていました。

ぼくは、せつせと紡いで巻まいた

きれいな娘っ子のために

やがてあの子は

このトリーレヴィープのおよめさん

獵師はお屋敷に帰ると、召使めしつかい女にこの話をしました。召使めしつかい女は、娘にこの話をしました。

さて、三日目。こびとがやって来ました。

「さあ、ぼくの名前をあててごらん」

娘は答えました。

「あなたの名前は、ペーターでしょ」

「ちがう」

「じゃ、パウルでしょ」

「ちがう」

こびとは、おおよろこびで、新しい金貨きんかみたいに顔を光らせて踊りまわりました。そのとき、娘はいいました。

「あなたの名前は、トリーレヴィープ！」

こびとはたちまち、しょんぼりしてしまいました。でも、この娘のことがほんとうに好きだったので、もういちど娘を助けてやろうと考えました。そこで、行ってしまいう前にこういいました。

「結婚式けつこんしきの日、みんなでごちそうを食べているところへ、きたないおばあさんが三人やってくる。そしたら、その最初さいしょの人をお母さんとよんで、二番目の人をおばあさん、三番目の人をひいおばあさんとよぶんだよ。お嬢むこさんがどんなにいやがっても、あんたはその人たちを親切にもてなすんだよ」

さて、結婚式の日、こびとのいったとおりに、きたないおばあさんが三人やってきました。娘は、おばあさんたちを親切にやさしくもてなしました。

ひとり目のおばあさんは、大きな赤い目をしていました。お嬢さんは、

「おかあさん、どうしてそんなに赤い目なんですか」とききました。おばあさんは、

「毎晩毎晩、夜通し糸を紡いだからだよ」といいました。

二番目のおばあさんは、口が耳までさけていました。お嬢さんは、

「おばあさん、どうしてそんなに口が大きいんですか」とききました。おばあさんは、

「糸を紡ぐために指をなめていたからだよ。何十年となく昼も夜もなめつづけてきたんだよ」

三番目のおばあさんは、足がよわって、つえがなければ立つことも歩くこともできませんでした。お嬢さんは、

「ひいおばあさん、ひどく足がよわっているけれど、どうしたんですか」とききました。

おばあさんは、

「あんまり長いことすわって糸紡ぎばかりしてきたからだよ」とこたえました。

おばあさんたちが帰ってしまおうと、お嬢さんは娘にいいました。

「これからは、もう糸を紡がなくていいよ。あなたを、あのおばあさんたちみたいにし
たくないからね」

そこではじめて、娘はあのこびとの気持ちがありました。そして、こびとのいいつ
けをよく守って、おばあさんたちを親切にむかえて、ほんとうによかったと思いました。

村上郁再話

資料『デンマークの昔話』山村静編訳／三弥井書店